

朝の9時半である。毎日そうなのだが、ペペ・レイは少し前に不機嫌な、ちょっと気にかかるような様子で事務所に入った。悪い時期を耐えている、探偵として小さな事件ばかり、重要性が無く多くの金銭が入らないのだ、エレナ、彼女は彼の別れた元妻だが、若い企業家でいい男、勿論金持ちである、太って少し禿げたペペの持たないものをすべて持った、若い企業家と付き合っている。ペペは毎日の生活の繰り返しに飽き飽きしていた、得るものは何も無い、常に気分が悪い、心が鎮まらない《こんなことってあるのだろうか ペペは考えた、どうか良い幸運が有りますようにと願った。》
こんなことを考えながら煙草をふかし窓の外を悲しい気分で眺めていた。